

ふるさとと探訪

(10)

市に変わり、西町ホールと使用した。北改称、市民の憩いの場として活躍してきた。

三十六年に京都銀行に入所を使い、伊藤さんも大会議室で筆記試験と面接を受けた。伊藤さんが窓口、二階には大小の会議室と伝票や資料などが納

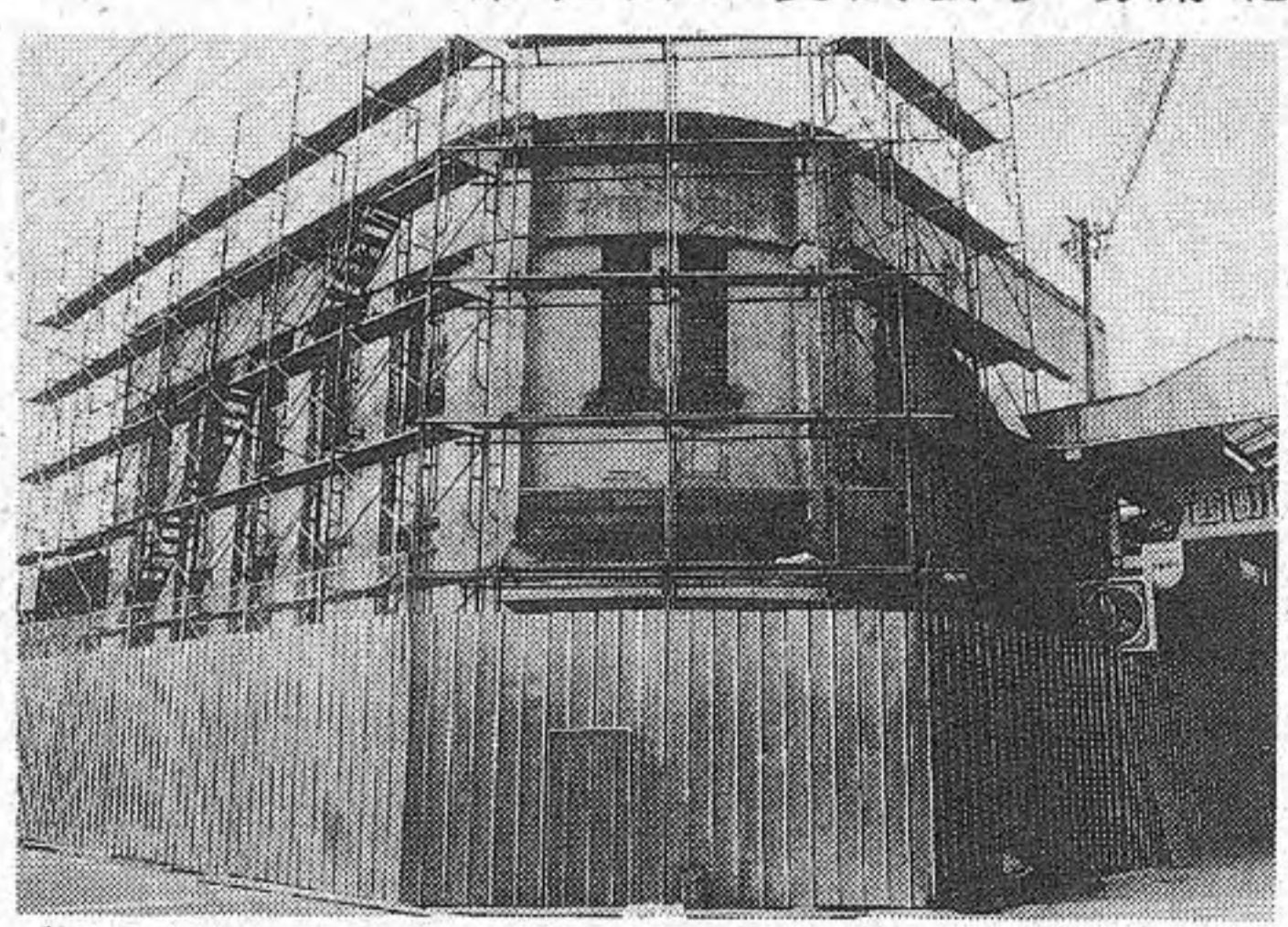
町商店街活性化事業の第一段として建設される西町商店街活性化拠点施設（仮称）の近代的なビルに生まれ変わる。

西町ホール

商店街のシンボリック存在

間もなく70年近くの歴史閉じる

銀行と様々な金融機関の建物として使われた。金融機関としての最後は、昭和五十八年まで同所で営業をしていた京都銀行綾部支店。伊藤さんの入行当時は同所が中丹の各支店の中枢の役割をしており、中丹支店も充実しておらず、仕事場としての環境は決していいものではなかった。「床も



70年近くにわたり市民に親しまれ続けた西町ホールは取り壊し作業が進められ、間もなく姿を消す(西町一丁目)

が引掛かり仕事がいかに難しくなっていた。しかも、綾部の商業地の中心は西町から駅周辺に移行しつつあった。そこで五十八年、京都銀行綾部支店

外見の重厚な造りとは裏腹に、中身は新しい時代に対応出来なくなってきた。京都銀行がオンラインシステムを導入したのは四十八年。同年には旧綾部支店にもコンピュータが、五十六年には現金自動取扱機が導入されたが、大正時代の建物では対応が難しくなっていた。しかも、綾部の商業地の中心は西町から駅周辺に移行しつつあった。そこで五十八年、京都銀行綾部支店

2年後には活性化拠点施設に
まれば愛される建物になることを期待する。(塩見)

大正14年に何鹿銀行本店として誕生
西町商店街のシンボリック存在として住民に親しまれてきた同ホールは、大正十四年、何鹿銀行の本店として誕生した。綾部の近代的な金融業の始まりだった。その後、西丹銀行、丹和ホールで二十二年間働いた。当時の間取りは、一階が窓口、二階には大小の会議室と伝票や資料などが納められている資料室が一部屋ずつあった。伊藤さんの入行当時は同所が中丹の各支店の中枢の役割をしており、中丹支店も充実しておらず、仕事場としての環境は決していいものではなかった。「床も

まれば愛される建物になることを期待する。(塩見)